



Hannibal Barca (247-182 BCE)



Zama (202BCE)

ハンニバル

ハンニバルは私の大好きな將軍である。これは判官贔屓なのであろうか。何処か寂寥の陰影を宿す、この孤高の將軍の持つ悲劇性が、当時はまだ若く、英雄指向の強かった私の心を捉えて離さなかったからである。しかし、その知識は貧弱なもので、せいぜいナポレオン・ボナパルトの他にも、彼に先立つこと実に2,000年以上も昔に、象を率いてアルプスを越えた偉大な將軍がいたのだ、という程度のものであった。それでも、古代ローマ共和国の宿敵であったカルタゴの生んだ不世出の名將で、イタリアに侵攻して一時的にしろ、当時、不敗を誇っていたローマ共和国を破滅の淵にまで追い込んだ。しかし結局は202 BCのザマの戦いで一敗地にまみれ、小アジアのどこかで毒杯を仰いで自ら命を絶った、ということまでは知っていた。ザマの戦いの相手はおそらく小スキピオであろうことも想像していた。しかし、イタリア本土で一体どのような戦い方をしたのか、何故、ローマ共和国をそこまで追い込みながら、最終的に占領、破壊できなかつたのか。そして、明確な敗北も喫してはいなさそうなのに、何故イタリアを去らなければならなかつたのか、など幾つかの疑問点が残っていた。しかし、より詳細に調べようにも私がまだ高校生だったあの頃には、学校の図書館では彼に関する書物は極めて限られていた。

今回、ハンニバルという映画が上映されていると聞いて、私はそれはつきりハンニバルの映画であろうと早合点した。そして、そうでないことを知って失望した。同時に青春

時代のハンニバルに対する郷愁が沸々としてわき起こり、今までの疑問点をインターネッ
トで調べることを思いついた。サーチをかけたところ一つの大変面白いサイトを発見した。
Hannibal tour ハンニバル ツアー <http://www.barca.fsnet.co.uk/> というサイトで色々な角度か
ら、ハンニバルとポエニ戦争に迫ることができるよう設計されている。次から次へとボ
タンでリンクしているために、短時日ではとても読み切れないが、電子紙芝居よろしく好
きな人には興味は尽きない。あの頃にはよもや、ハンニバルに関する情報がこんなにも簡
単に、豊富に手に入る世の中が来るとは思いもよらなかった。しかも、画像付きである。
当時、私が必死になって頭の中に思い描こうとした、古代ローマ時代の風景の数々が、い
ま現実のものとして目の前に鮮やかに蘇る。古代ローマ時代の原著にさえ触れることも可
能なようである。実に便利な世の中になったものと感慨しきりである。

ところで夢中で翻訳したので、細部には誤訳も多々あるかとは思いますが、少なくとも私の
長年抱いてきた疑問点の幾つかは氷解した。但し訳し方は、私の青春時代に思いを馳せて
100%。ハンニバルに感情移入して翻訳した。勿論、大意は曲げないように注意したが、私の
英語力のつたなさで何とも理解できないところは、独善の翻訳で全てハンニバル側優位で
ある。これを野球に例えれば、際どい判定は全てハンニバル軍セーフ、ローマ軍アウトで
ある。

ザマの戦いは痛々しくて遅々として訳が進まなかった。何故なら、彼はスキピオの軍を

祖国カルタゴからなるべく引き離そうとしているが、その距離は僅か 80 km (50 miles)であ
る。もし破れば祖国の滅亡は明らかかな悲壮な戦いである。この時、敵将スキピオは 33 歳
(216 BC のカンネーの戦いの時、19 歳と記載されていた。)である。ハンニバルは 45 歳 (221
BC に 26 歳の記載あり。)であろうか。まだ、決して気力の衰える年令ではないが、それま
での彼の勝利を支えてきた、ヌミディアン騎兵はすでにスキピオ方についている。しかも、
ハンニバル軍の主力は新兵で実戦経験が皆無だった。この時、すでに彼は敗戦を覚悟して
いたのだろうか。両軍の兵士達が戦闘隊形を整えているひとときの静謐の間に、ハンニバ
ルは敵将スキピオと優柔不断のうちに会見している。この時、果たして彼の胸中に去来す
るものは一体何だったのだろうか。14 年前のカンネーの大勝利に思いを馳せていたのだろ
うか。それとも、祖国を遥かに離れた異国の地で、非業の最期を遂げなければならなかつ
た父の死の枕辺で、彼が固く誓ったあの誓いを、ついに果たし得ないかもしれない悔恨を
思っていたのだろうか。一時は掌中に掴みかけた父と子の見果てぬ夢が、今はかなく潰え
去ろうとしている時、果たして天空の父はこの自慢の愛息子（ハンニバルはバルのお気に
入りという意。父の名はハミルカルバルカ）に、何を伝えようとしたのだろうか。

この戦いでハンニバルが唯一頼みとしたのは、祖国、北アフリカの地の利を活かした密
集隊形を敷く戦闘象軍団であった。しかし、スキピオは 14 年前のファローではなかった。

これを封じ込める巧妙な策略を自軍の兵士達に授けていた。十分に訓練を積み重ねてきた兵士達は、かつてのカルタゴ軍がそうであったように、自信に満ちて自分達の指揮官を信頼しきっていた。トランペットで象を威嚇し、自軍のフォーメーションを横列から縦列へと変幻自在に変化させて、密集象軍団の間をすり抜けてやり過ぎたのである。カルタゴ軍の最終ラインを構成していた、ハンニバル自ら率いる、常に彼と生死を共にしてきたベテラン軍の鬼気迫る奮戦は凄絶を極めたようである。しかし、敗勢如何ともなし難く、ついに大勢を覆すには到らなかつた。そして、戦いはスキピオがまさにカンネーの戦いを逆用して圧勝した。ハンニバル自身が、カンネーで若きスキピオにこの戦法を授けたと言っても決して過言ではない。スキピオはこのローマ共和国史上空前の大敗北を、生涯の恥辱として、この日まで深く脳裏に刻み続けて来たに違いない。そして、これがハンニバルの喫した生涯で唯一の、しかし、致命的敗戦となつた。ローマ共和国はスキピオのこの功績を称えて、深い畏敬と感謝の念を込めてアフリカーヌスの尊称を贈つたという。

このあまりの不条理を、私には心が痛んでとても翻訳できなかつた。

その昔、キリストが生誕する遙か昔に、今ではすでに歴史上のこととして、人々の記憶の中ではすっかり風化して忘れ去られてしまつたが、現在の北アフリカ、チュニス近郊に地中海の順風を満帆に受けて富み栄え、栄華を極めた帝国が実在していたという。

カルタゴ……海洋民族であつたフェニキア人が建てたとされているこの商業帝国は、過

去幾世紀にもわたつてローマ共和国と地中海の覇権を競つてきた。その覇権を奪還すべく、ハンニバルは古代ヨーロッパ史上最強を謳われた、ローマ共和国に対して敢然と戦いを挑み、ローマのいかなる將軍よりも、その軍事的才能においてはこれを遙かに凌駕していた。しかし、彼が取り戻そうとした地中海の制海権を、最後までローマに握られていたことが、結局、彼の致命傷となつた。歴史とはかくも残酷で悲しいものなのだろうか。

その後、カルタゴは紀元前 146 年にスキピオ アフリカーヌス (小スキピオ) Scipio Africanus に攻められ、一時は繁栄を極めたその都市と帝国は、燃えさかる炎と共に灰燼と歸した。

高校 2 年生の時、真新しい世界史の教科書と一緒に、歴史名言集という副読本が配られた。確かその最初の 23 ページのところだったと記憶している。

「アッシリア、ペルシアはすでに滅び、ギリシャ、マケドニアも滅びた。今、カルタゴも炎上しつつある。次に来るものはローマであろうか。」

小スキピオが、傍らの副官に、夜空を焦がして燃え上がる、紅蓮の炎を見つめながら、慨嘆しつつ漏らしたと伝えられる言葉である、と注釈されていたことを、今さらのようにはつきりと覚えている。

平成十三年八月十日

熊谷 眞知夫記



**The meeting between Hannibal and Scipio
shortly before the battle of Zama (engraving, c1880).**



